

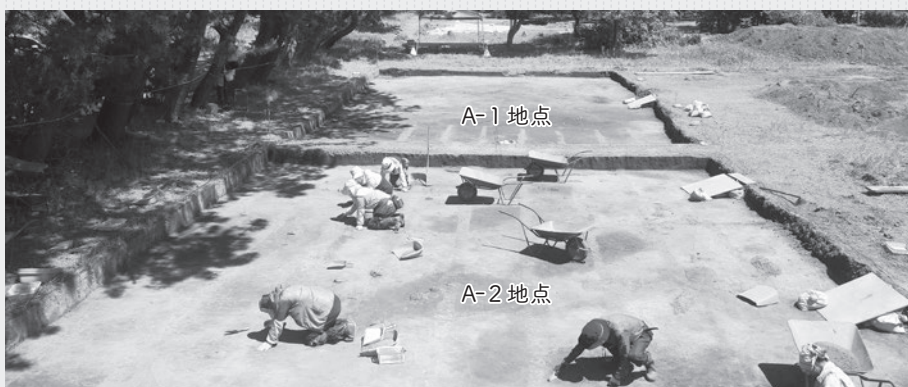
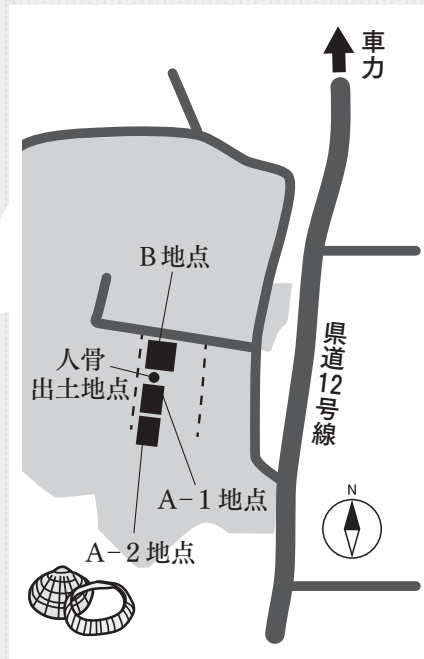
「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録されてから、2年を迎えます。今月号では、令和4年度に教育委員会が実施した史跡田小屋野貝塚の発掘調査について、小林学芸員がまとめた調査報告をご紹介します。当時の人々がどんな暮らしをしていたか、皆さんも想像を巡らせてみませんか。

史跡田小屋野貝塚発掘調査報告

遺跡の概要

田小屋野貝塚は縄文時代前期から中期(約6千～4千年前)を中心とした遺跡です。遺跡内にはヤマトシジミなどの貝殻が堆積してできた貝塚が点在しています。また、骨を加工した道具やベンケイガイ製の貝輪(プレスレット)も見つかっており、当時の人々の日常生活を垣間見ることができます。

平成24年の調査では、土坑墓の1つから女性の人骨が出土しました。令和4年度はこの調査地点の南北に範囲を広げ、竪穴建物跡の構造や墓域の広がり进行を解明するために、A-1地点、A-2地点、B地点の3カ所、計528㎡を発掘しました。この調査で得られたデータは、将来的な遺跡の整備に向けて役立てられます。



A地点全景

発掘調査の成果

市教育委員会文化財課 小林 和樹 学芸員

人骨出土地点南側
(A-1地点・A-2地点)

①縄文時代の遺構

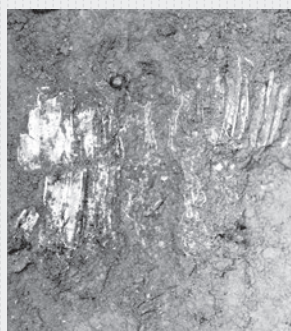
ここは、近年まで畑として利用されてきました。耕作土には縄文時代前期の土器の破片や石器が混じっていました。一方で縄文時代の遺構(生活の痕跡)はほとんど確認できませんでした。

②古代(中世(平安・鎌倉・室町時代)の遺構

大型の土坑4つ、溝跡1つ、井戸跡3つなどのほか、掘立柱建物の可能性のある柱穴が6つ見つかりました。井戸跡からは、馬の歯が見つかりました。馬の出土事例は市内初であり、当時既に人々が馬とともに暮らしていたことが分かりました。



古代～中世の大型井戸跡



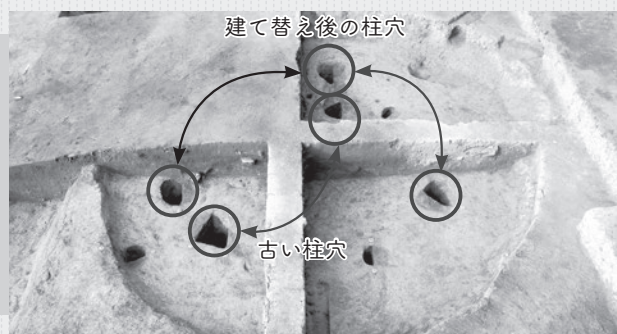
出土した馬の歯

人骨出土地点北側（B地点）

ここは、近年まで宅地として利用されてきました。地表の土を剥いだところ、縄文時代の遺構の痕跡が複数確認されました。調査終了までに確認された遺構は竪穴建物跡8つ、食料の貯蔵穴（フラスコ状土坑）1つ、捨て場1カ所などです。主な遺構を2つご紹介します。

遺構①

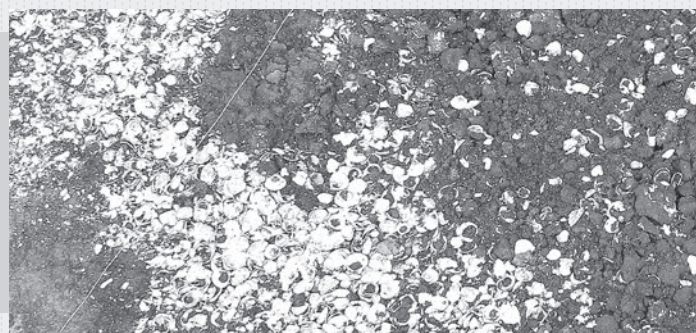
直径約5mの円形の竪穴建物跡です。住居として使用された後に捨てられた縄文時代前期の円筒土器が多量に出土しました。床面では深さ80～90cmの柱の穴が複数確認されました。隣り合っており、並んでいる柱の穴のうち一方は古いものであると考えられ、重複する範囲で建て替えを行ったと推定されます。



竪穴建物跡の全景

遺構②

直径約5.2mの円形の竪穴建物跡から縄文時代前期の円筒土器とともにヤマトシジミがまとまって検出されました。下の層はブロック状の土が多量に混じっていたことから、住居として使用された後に人為的に埋められたと考えられます。



シジミの貝層

まとめ

調査の結果、人骨出土地点と同時期の竪穴建物跡が北側のB地点でも確認され、さらに居住域が広がるということが明らかになりました。一方で土坑墓は検出されず、墓域の広がりには確認できませんでした。

南側のA地点については、土坑1つのほかに明確な縄文時代の遺構がありませんでした。A地点の東側と南側では、過去の調査で同時期の竪穴建物跡が見つかっており、それぞれの地点の縄文時代前期の土地利用について考える必要があります。

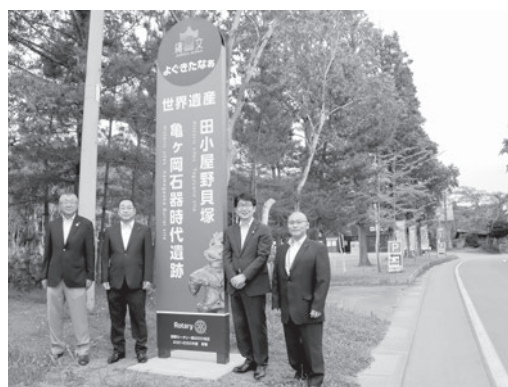
田小屋野貝塚では過去の調査でも平安時代の集落の存在が確認され、今回の調査でも、A地点を中心に平安時代以降の溝跡や井戸跡などが見つかつたほか、馬の歯や北海道系の擦文土器など、当時の生業や交流を表す遺物が出土しています。この地には縄文・古代と異なる2つの時代に拠点的な集落が形成され、周辺地域との交流が行いながら生活を営んでいたことがうかがえます。

「よぐきたなあ」

案内看板が完成！

縄文遺跡案内所南側の県道沿いに国際ロータリー第2830地区が寄贈した案内看板が完成しました。高さ3.6メートルある看板には、津軽弁で「よぐきたなあ」「まだこいへ」と来訪者へ歓迎の気持ちが込められています。

現地で看板を確認した国際ロータリー第2830地区2021～22年度ガバナーの成田秀治さんは「迷うことなく世界遺産を見学に来てほしい」と話し、山谷教育長は「立派な看板が設置され、良い目印になる。非常にありがたい」と感謝しました。



看板を確認した（左から）五所川原イヴニングロータリークラブ小田桐浩会長と成田バスターガバナー